

2011年度 第9回 建築・住宅技術アイデアコンペ

提案タイトル		『生物多様性保全用の協力型データベース』の開発
提案概要 (200字程度)		<p>自然環境の悪化に伴い、生物の多様性が、これまでにない早さで刻一刻と失われつつあり、生物の保全に取り組む企業が多くなってきた。具体的な対策効果を評価するためには、物差しとなる数字で示すと理解しやすいため、各企業が独自に生物多様性保全に関する取り組みを定量的に評価しているが、様々な項目で評価を行っているため、比較することができない。統一された項目で評価を行い、信頼できるデータベースを構築するためには、評価項目が多岐にわたり、一企業では、開発が困難であるが、世の中のニーズは高いと考える。</p> <p>本提案は、生物多様性の定量評価を行うために必要な統一した項目でデータベースを構築するとともに、今後データベースの内容を充実させるために、使用者が協力し調査内容を登録することができるWEBシステムの開発を目的とする。</p>
提案ポイント	①新規性	・各企業で独自のデータベースにて生物多様性の評価が行われているが、統一された項目として情報公開している生物多様性のデータベースは、数少ない。
	②実用性	・建築関係者が周辺環境の検討や、敷地内の緑地設計を行う際の検討資料として使用することができる。
	③実現可能性	・植栽・昆虫・鳥などのデータベースが必要であり、生物学・農学の専門家からのアドバイスがあれば、実現可能である。
	④建築や社会に対するインパクト	・統一された項目で評価することで、データの信頼性が高まる。

提案ポイントについて

- ① 新規性： 「従来の建築・住宅技術」に対する新規性について述べて下さい。
- ② 実用性： ご提案のアイデアが、学術研究や情報の蓄積や整理の範囲にとどまらず、都市・建築空間で実地に用いる、あるいは実際に役立つ点を述べて下さい。
- ③ 実現可能性： ご提案のアイデアが、理論や知識と情報、組織や体制、資金などの面から、達成される見込み・見通しを述べて下さい。
- ④ 建築や社会に対するインパクト： 生活や産業経済、建築空間に対する影響など、研究目標が達成され、成果が実用化された場合の建築や社会に対するインパクトについて述べて下さい。

※ こちらにご記入頂いた内容も審査の対象となります。提案ポイント項目は審査評価基準に基づきます。

『生物多様性保全用の協力型データベース』の開発

1. はじめに

地球温暖化防止に企業の努力が不可欠のように、生物多様性の保全においても企業の活動が必要である。企業が生物多様性の保全にどのような影響を与えているか把握し、具体的な対策をとるためには、数字で評価する必要がある。学協会・団体において認証制度が設けられているが、評価に一月から数年程度の期間が必要であり、建築関係者が生物多様性の保全に配慮した計画を検討することが難しいと考えられる。

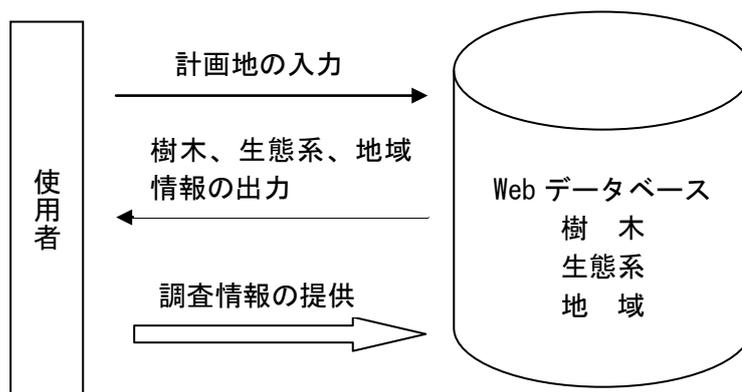
既に各企業で生物多様性保全に関する取り組みを定量的に評価し、推進する動きもあるが、様々な項目で評価を行っているため、比較検討が困難である。統一された項目で評価を行うための信頼できるデータベースを構築するには、評価項目が多岐にわたり一企業では開発が困難であるが、世の中のニーズは高いと考える。

本提案は、生物多様性の定量評価を行うために必要な統一した項目でデータベースを構築するとともに、今後データベースの内容を充実させるため、使用者が協力しデータベースに実施内容を登録することができる WEB システムの開発を目的とする。

2. 概要

2.1 提案する主なデータベースの内容

樹木のデータベース	木の種類、草花の種類
昆虫や鳥のデータベース	生息地情報 生態系情報
緑地のデータベース	地域の緑地情報



2.2 提案するデータベースの特徴

- ① データベースの内容を今後充実させるため、使用者が計画場所で実施した内容を公開・登録し、地域の生物多様性保全に協力する。
- ② 使用対象者は、建築関係者であるため、用語だけではなく、図や写真を入れ、わかりやすく表示する。
- ③ 信頼性を確保するため、第三者機関から認証されるデータベースの構築を目指す。
- ④ 生物のデータは地域や周辺環境に限られた種類のみ目標や指標種を合わせ過ぎてしまうと、他の種類のことを軽視してしまうことが考えられるため、一般的な種類についてもデータを作成する。
- ⑤ 場所は、陸地や建築物の屋上でも活用できるものとする。

3. 課題

実現するための主な検討課題は、以下のようなことがある。

- ① 今後もデータ量を増やすためには、無償でダウンロードすることが必須である。会員登録を行い、多くの使用者にデータを提供してもらい、情報の共有ができることが望ましい。
- ② 信頼されるデータを作成するためには、実際にモニタリングの必要がある。
- ③ 市町村の公園管理課、団体からの情報提供も必要となる。
- ④ 評価方法については次のステップで考える。

4. 研究開発体制

本提案を開発するためには、生物学・農学・園芸（植物・昆虫・野鳥）の専門家が必須である。情報のネットワークを広げるため、生物多様性や自然保全に興味のある企業、メーカーや設計事務所、建設会社で構成する。

参考文献

- 1) 里山開発 高まる CSR の圧力, 日経エコロジー 第1特集 本気で向き合う生物多様性, 2009. 11
- 2) 環境復元と自然再生を成功させる 101 ガイド ビオトープ, 誠文堂新光社, 2004. 9. 1